

<巻頭言>

## 教師の手による教育実践の発信と質向上を目指して

寺嶋 浩介 (第9期企画委員長, 大阪教育大学)

日本教育メディア学会においては、査読付きの学会誌「教育メディア研究」とは別に、査読なしの教育実践による論文報告集「教師のセルフスタディ」をオンラインで発行することにした。この新しい試みの目的は、ふたつあり、教育実践の充実度を学会から発信することと、学校の教員に実践研究の第一歩として取り組んでもらうことである。

近年、教育実践研究の重要性が指摘されている。教育系の多くの学会誌が「教育実践研究」というようなカテゴリを設け、論文を募集している。大学現場では、教職大学院が設置されてから10年が経過し、多くの現職教員の大学院生が、自身の学校現場等をフィールドの中心とし、実践研究を重ねている。

一方、教師教育実践の「セルフスタディ」、すなわち教師を対象とした教育者のセルフスタディとして、ロックラン・武田(2019)が日本語文献として出版している。本書には、セルフスタディの方法論として、重視したい点などが示されている。

本報告集においては、教師教育者が投稿する可能性は排除しないものの、基本的には教師が自身の授業の中でセルフスタディを実施するものとして位置づけている。中でも、初等・中等教育機関に所属する教師である正会員が投稿することを期待している。こうした冊子を用意した理由は、主にふたつある。

ひとつめに、先に述べた本学会を含めた査読付き論文誌では、実践研究に関するカテゴリは設けられているものの、「セルフスタディ」の視点からすれば、採録への敷

居は高いと考えるからである。実践研究は特定の教育方法の効果や、特定の学力に絞った児童・生徒への効果の検証などといったように、研究内容のターゲットが絞られがちになる。そしてエビデンスに基づく考察が重視されるので、深い振り返りに基づく実践者なりの考えは、筋から離れるものとして、記述しにくい。本誌においては、適切な評価やそれにつながるデータはあったほうが良いのは前提としてはあるが、実践について包括的に紹介することや、方法の信頼性はやや低くなるかもしれないが、個人の振り返りがより深くなる記述があれば良いのではないかと考える。

ふたつめに、実践報告の投稿先が学会誌を除けば限られるという点がある。以前と比較すると、専門的な出版物自体は少なくなってきたおり、大学紀要についても出版頻度が減っている。いずれにせよそもそも、誰かとのつながりがなければ、発信もしにくい。独自にWebなどで発信しても、それを見てくれるコミュニティがないと、どれほど見てくれるのかもわからない。少なくとも教育メディア研究というコミュニティの中で、教育実践を発信する場を作り、多くの人が発信できる可能性を持つ、というのは学会の企画委員会が新しい取り組みのひとつとして提案するのは意義があると考えた。

具体的な手続きとして、2019年度4月の学会理事会で発行が決定された後、投稿を募集した。大きな条件としては、以下のものを掲げた。

・年次大会(2019年度は徳島文理大学で開催)で発表した教育実践であること。

・執筆者(筆頭筆者)は、学会の正会員であること。

・共著は可であるが、実践者本人が筆頭著者を務めること。

なお、これに付随し、議論の場を設け、投稿を促すため、2019年度年次大会においては、課題研究として「教師のセルフスタディ」も設定した。ここでは、初等・中等教育機関に所属する教員の発表を優先するが、高等教育機関において、自ら教育実践を計画・実施した方も対象とすることにした。本号においては、2本の論文が掲載される運びとなった。

本誌の性格として大きな点の一つとして学会誌「教育メディア研究」との違いを出すために、査読は無しとしている。ただし、投稿後、企画委員による閲読体制を入れた。文言のチェックだけではなく、論文の改善につながるようなアドバイスを含めている。運営は学会の編集委員ではなく、企画委員会の編集として、送り出すものである。このような視点から、「セルフスタディ」を謳っていながらその質について意見がある方もおられるかもしれない。しかし、本学会はこれまで学校現場との共同研究や教育実践研究を古くから重んじてきた歴史がある。ご指摘は受け止めながら、さらなる質向上のために、学会内で議論をしていきたい。

最後にはなるが、編集にあたっては、第9期企画委員会のメンバーにより、準備、年次大会課題研究の運営、論文誌の閲読やその手配にあたっていただいた。記して感謝申し上げたい。

#### 参 考 文 献

- ロックラン, J., 武田信子 (監修) (2019) J.  
ロックランに学ぶ教師教育とセルフスタディ. 学文社, 東京